

〔書評〕

真下厚著 『万葉歌生成論』

増田茂恭

第一部第三章は次のような一文で書き始められている。

日本古代の『万葉集』の歌々について研究する一方、日本各地の口承文芸、とりわけ奄美・沖縄地域の口承文芸や祭祀・信仰について調査・研究を続けてきた立場から、『万葉集』についてオーラルな世界からみえてくるものについていささか論じてみたい。

著者は長年に亘って奄美・沖縄で口頭の詞章や祭祀の調査・蒐集を行ってきた。その現場での豊富な体験や研究の集積の上に立って『万葉集』の分析を試みたのが本書である。実際ここから派生する課題は多方面に及ぶのだが、一貫する方法論的立場は「オーラルな世界」の問題領域として『万葉集』を考察の対象にすることである。本書の構成は四部と付論から成っており、第一部で方法論を述べ、第二部以降から具体的な表現論が展開する。

真下厚著 『万葉歌生成論』

第一部「万葉歌と声の世界」は五つの章に分けてさまざまな角度から「オーラルな世界」の理論構築を図る。まず、「オーラルな世界」とは何か。それは『万葉集』の文字化以前の膨大な「声の世界」と通底している。いわゆる万葉の時代にも書かれなかった夥しい数のウタが存したことを思わねばならない。このことは誰もが想定しているのだが、著者は多くの先行文献を紹介・検証しながら奄美・沖縄との相違点と可能性を確認していく。そこで著者が最初から拘るのは、「万葉歌はヨミの文芸」であるとする主張だ。「うたふ」と訓むのは「唱」と「詠」のみであるという藤井貞和氏らを援用しつつ、万葉のウタは「ヨム」（朗誦する）文芸であると説く。その一方で、福田晃氏らの論文を引きながら奄美・沖縄の呪詞が「ヨミの形式にあたる口頭詞章」であることを重ねる（第一章）。

この「ウタフ」ではなく「ヨミ」の文芸であるという主張は単に詠法の違いをいうのではない。

声の表現の累積のなかに多くのイメージや物語が存しており、それとかかわって歌が生み出されてくるのである。歌ことば自体もそうしたイメージや物語を内包させている。そして、その場で歌が歌い継がれ、または交わされてゆくとき、しばしばこうしたイメージや物語が紡がれてゆくことになる。

(第二章)

万葉歌も物語の胎生のようなカタリを内に孕んでいて、いわゆるウタ状態というのはそうした叙事的な内実をもつてうたわれるのであって、感情の発露とのみ受け取ってはならないというのだ。「ヨミ」の文芸、また声の世界とは、ウタとカタリを分別したところの和歌の問題ではないのである。ここに本書の新しく切り開いた世界がある。

本書の『万葉歌生成論』の謂は、伝承の現場で「声の世界の歌について今日なお生成・流動する奄美の島歌など、奄美・沖縄の声の世界を手がかりに」とか、ウタは生活の場や祭祀の時に「声によって伝承され、繰り返してゆくもの」(第二章)といった文脈からうかがえるように、こうした声のウタの生態を注視するところから名付けられたと思われる。

第三部「万葉歌の歌ことば」は三つのテーマからなる。すなわち「水の聖地の『上』」、「奥山」、「潮干」で、いずれも歌ことばとして慣用されているので表現論としての言い方であろうが、民俗的には異境と接するところ、神を祀る聖なる場の問題でもある。

その水の聖地とは「滝の上・井の上・湯の上・垂水の上」で「神の出現する」場所であり、その「上」の景物「花・草・木」などは選ばれた特別の表現であった。「奥山」も「人里遠く離れた山中の異界」であり、「真木・さかき・馬酔木」なども呪物である。このようなよく知られた万葉歌を扱いながらも、ウタの表現論的歳き方は絶妙である。次の「難波潟潮干に立ちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ」(7・1160)なども何故「潮干に立ちて」とうたうのか、諸注触れてこなかったが、そこに「娘子」が登場するのは神婚幻想であるとする。さらに「恋の物語」を生むところまで言い及ぶ。

第三部「万葉歌の発想・表現」は六つの章立てで、各論は独立している。特に考えさせられたのは第一章の「長意吉麻呂応召歌の讃歌性」である。三首を並べてみよう。

大宮の内まで聞こゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声

3・23八

鯛飯うぶめの海の庭良くあらし刈り薦すすの乱れて出づ見ゆ海人の釣船

3・25六

海人娘子棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに梶かきの音聞こゆ

6・九三〇

二首目三首目の作者は下句で海を「見」たり「聞」いたりする位置にあり、上句では「らし」を用いて神の異界である海の状態

を推定するという、いずれも豊饒を讃える類型的表現である。ところが一首目の当該歌は「大宮の内まで」と表現することによって、むしろこちら側を閉じ、空間の中心として位置づけるものとなっている。いわば、重心の軸を反転させているということができよう。」と指摘する。確かに当該歌の「聞こゆ」の主体は作者であるという他ない。しかし、その「大宮の内」とは、天皇のいる場所であり、こちら側の神々性の中心である。その空間が「閉じ」られているという指摘は、權威の中心を空にして讃仰するという古代天皇歌の表現のしくみであった。

海に向こう側の聖性をこちら側に転換して閉ざしているというこの指摘は、日本的王権の本質を言い得ていると思う。こうしたところに私は本書のもつ、もう一つの表現論の成果を見る。

以下、第三部には「潮干」論と併せて読むべき「行幸従駕歌一首の景」、相聞歌を中心に「通いの歌と馬」「夢に見ゆ(る)」というたうことば」の論文、そして「―事物等+そ」型の句を抽出して宗教的霊能者が贈り物である呪物の来歴を説くという発想類型を提示する。従来のウタ論では捉えられなかった一文形式の叙事語りの指摘は著者の真骨頂を示す。最後の「万葉類歌の表現性」も重要な論文である。行旅歌には類型的なウタが多いが、それは地名を入れ替えただけのものとされてきた。しかし、その土地の風景の描写に必然性がある、と論証する。

第四部は「万葉歌の歌群構成」である。「柿本人麻呂留京歌群の発想と構成」は持統天皇行幸の祭式空間として讃歌の構成を、

「柿本人麻呂歌集皇子献歌群の構成と機能」は男の求愛と女の愛の誓約という構成をみる。また、「藤原麻呂・大伴坂上郎女贈答歌の生成」及び「成立」は、麻呂と郎女の個別の贈答歌がそれぞれ贈歌と答歌に構成され享受される物語的構成であることを論じ、組歌として編集されて歌群が成立する事情を想定する。さらに終章の「大伴家持諸郡巡行歌の構成」は、同守として越中諸郡を巡行する歌群が意図的に構成されたものであるとする。

この第四部では、それぞれの歌群の成り立ちがうけれども「構成」に共通項があるのは、文字を介した物語的構成に論点が置かれているからである。異境と接するところで神の妻は松浦河歌群の仙女のイメージに重ねられ、掛け合いのウタの応酬を構想して物語歌にする編集論のあり方。また、神の巡幸を擬似的に馬や船で巡行する歌群は意図的に構想されているとする。日本列島弧の古代のヨミの文芸論はこのように括られている。

以上、第一部の方法論から以後の各論において、本書がウタとカタリに相渉る問題を提示していることは明らかである。それは、奄美沖繩を視野に入れて古代文学を論じた先人として故折口信夫の例を思い出してよいのかも知れない。表現として生成していく過程で「フルコト」を論じた藤井貞和氏、また古崎信孝氏の「巡行叙事」論などの発生論に列して本書を置くと、著者の発想の根底が理解し易くなると思われる。

なお、報告しておきたいことがある。三月十四日、京都の某所で本書の合評会が開かれた。参加者は居駒永幸氏・近藤信義氏・

高野正美氏・多田一臣氏・保坂達雄氏・三浦佑之氏・森朝男氏らが上洛されて、著者に私が加わった。奄美・沖縄にフィールドワークをもつ著者の仕事は早くから注目され、期待されていた。そうした話題からはいって、第二部以降の各論は先行論文や諸注釈書の整理も行き届き、完成度も高いと評価されていた。質問は第一部に集中していた。それも伝承と生成を繰り返す「ヨム」ウタに対する「書く」歌（文字化された歌）との関わりであった。これは著者の次の仕事であろう。本書の「あとがき」にも声の歌の世界との比較研究はさらなる「追求」が約束されていた。

本書は二〇〇三年六月、立命館大学に学位論文として提出され、同大学の学位取得促進制度による出版助成を受けている。

（三弥井書店 二〇〇四年九月 三九八頁）

本体価格八四七六円

（ますだ・しげやす 平安高等学校教諭）